

産褥早期母子関係の生理学的評価

～唾液マーカーでストレスを測る～

滋賀医科大学医学部看護学科

立岡 弓子

看護学研究において、エビデンスを実証する研究が求められている。研究におけるエビデンスとは、客観的指標である。再現性のあるデータ測定の意義は研究の信頼性を高めることになる。

早期母子接触の有効性を明らかにしていくなかで、本当に母子にとって心と身体への安らぎや安寧といった効果をもたらされているのか、母子相互作用を促すケアとして唾液中のコルチゾール・クロモグラニンAを客観的指標として継続的に研究に取り組んできた。研究データの精度や信頼性を高めるために、唾液中へのストレス関連ホルモンの分泌過程や半減期について理解を深め、唾液採取方法での注意事項や禁忌事項、手技や保存方法を詳細に検討することが大切である。分娩直後の母児の心身のストレス応答を正確に測定するために、羊水や血液の混入、母親の分娩による口渴への対応など、口腔内環境を厳密に一律の条件下にすることが必要であった。また、採取容器についても新生児への安全性と唾液サンプルの量の確保のための工夫を検討した。その他、遠心分離による抽出方法や唾液の前処理方法と不純物の除去や希釈方法、酵素免疫測定法での標準曲線の設定など、生理学的評価を行うには、実験プロトコルを厳密に検討し、研究者自身の実験技術を上げていくことが求められる経験をしてきた。

採血とは異なり、非侵襲的で簡便性に優れている唾液を用いて、分娩直後の母児のストレス測定に取り組んだ研究経験の過程をプレゼンテーションする。分娩後早期に母子接触を行い、五感を使って同調する母子関係のなかで、末梢神経を介して中枢神経系に伝達された分娩というストレス事象がさらにストレス認知に作用したのか、それともストレス緩和に作用したのか、『心』と『身体』のストレス応答マーカーである生理学的評価について、ストレス関連物質の濃度から読み取り数値化・定量化した指標の意味について説明していく。

第 17 回日本母性看護学会学術集会

産褥早期母子関係の行動学的評価

～授乳場面における母子観察のポイント～

北里大学看護学部

香取 洋子

現代社会において、虐待は決して特別なものではなく、子育てストレスや育児困難感の延長線上に存在すると考えられるようになってきています。それゆえ、我々看護職には、早い段階から、母子の関係性をサポートすることが強く望まれています。

特に新生児・乳児期において、授乳場面は母子相互作用の主要な機会となり、児の合図に対する母親の感受性を測定する良い機会であるといわれています。また、母子観察の第一人者である Ainsworth(1969)は、母親の授乳様式とその他の養育場面での母子のやりとりが非常に類似し、授乳場面における相互作用パターンと子どもの愛着行動には関連があることを明らかにしています。

したがって、我々看護職は、出産後早期から母子関係を適切にアセスメントし、母親の応答を促進することが必要です。しかし、わが国では出産後早期の母子相互作用を測定する尺度は数少ないのが現状です。出産後早期から適用可能であり、母親項目、児項目、二者関係項目より構成され、観察に基づく行動特徴から評価を行う Price(1983)の Assessment of Mother-Infant Sensitivity Scale(以下 AMIS とする)を紹介し、授乳場面における母子の観察ポイントについて解説しながら、普段見逃していた現象や自分の傾向などについても気づいていただける機会になればと思います。